

担任団と連携し生徒を導く 進路指導部の業務改善アイデア5

進路指導の担当教員が学校のなかで抱えがちな課題。ここではそれを、
進路指導室づくり、資料の活用、個別指導での役割、進路決定後のフォロー、追跡調査の5つの視点に分け、
長年、進路指導の業務改善に取り組んできた西村和美先生をアドバイザーとして、解決策やアイデアをうかがいました。

取材・文／永井ミカ

1 進路指導室

導線とディスプレイで 生徒の「通り道」に

アドバイザーの実践

アドバイザー

専門高校、新設校、進学校と経験。進路指導歴は17年に及ぶ。前任校は東京都立上水高校。2012年度より、進路部主幹として都立昭和高校に赴任。多摩地区高等学校進路指導協議会事務局次長。



東京都立昭和高校
進路部主幹
西村和美先生

School Data

1949年創立／普通科
生徒数955人(男子500人・女子455人)
／進路状況(2014年度実績)卒業生275
人中、大学進学224人、短大進学6人、専
各進学19人、その他26人

進路指導室が生徒が訪れにくいところに配置されている。また、職員室と離れているために、学年団と連携がとりにくい。そんな悩みを抱える学校は少なくないのではないだろうか。

昭和高校は2014年に新校舎が完成。フリーに使えるラウンジからつながるオープンスペースに進路指導室を置いた。そのうえで、表紙のビジュアルが印象的な大学のパンフレットを外からでも見えやすく配置したり、昼休みにラウンジのプロジェクトに大学の紹介DVDを流すなどして、生徒の興味を引く。また、同校では各教科が週末課題を出しているが、課題の配付場所、回収場所をラウンジとしている。生徒が必ず進路指導室周辺を通らな

なくてはならないように仕向けているのだ。これらの工夫により、生徒が進路指導室に気軽に立ち寄るようになった。「今、ちょっといいですか」と生徒が相談を持ち込むと、「そういう話だったら私も聞きたい」と別の生徒まで加わることもあるそうだ。ちなみに他の人には聞かれたくない相談がある場合は、別フロアに相談室が用意されている。

そして、進路指導室は職員室と扉ひとつ隔ててつながっており、職員室に入るとすぐに進路指導部員の席がある。「職員室にいれば、学年団の困っている声などが聞こえるので、手助けがしやすい」と西村先生。3年の学年団と進路が話す内容が低学年にも伝わり、進路関係の動きが早まる傾向もあるという。物理的な距離が心理的な距離を縮め、連携がスムーズになった。さらに「進路指導部員が職員室の中に入ったことで、生徒が合格の報告に来たときに教員全員で喜べるようになって

手前がラウンジ、右奥が進路指導室、左奥が体育館。生徒がよく行き来する一角。



進路指導室の扉の向こうは職員室。開けてすぐのところに進路指導部員の席がある。



体育館から生徒が教室に戻るとき、進路指導室にディスプレイされた大学のパンフレットが目に入る。100円ショップで入手した透明なメニュー立てを活用。

たのは非常に大きな変化」と西村先生。3年担任団と進路指導部で盛り上がりがあると、部活顧問や教科担任、1、2年生の先生も自然に参加し、進路をめぐる学校の一体感が増したという。

他校へのアドバイス

西村先生「進路指導室の場所の移動は難しいと思いますが、生徒が入りやすい工夫は可能かと思えます。例えば、必須の書類を付近で配付するなど、生徒が進路指導室前の廊下を通るように導線を作り、生徒の目の高さに進路関係の資料をディスプレイ。気になって足を留めるような仕掛けを作ります。このような書類の置き方なども学年団と話し合うのがおすすめ。ふだんから話し合いをしておくことで、いざというときの連携もスムーズになります」

「持ち歩きデータ」としての 進路の手引きづくり

「進路の手引き」のように進路指導部が発信する情報や、大学パンフレットなど進路指導室に入ってくる大量の情報をいこなせていない学校は多いのではないだろうか。また、デジタル情報との距離と使の方も多くの学校が悩むところだ。

西村先生は「進路の手引き」の内容についてはデータ重視である。「進路に関する

学部名	教科数	得点
文学部	3-3	84
経済学部	3-3	84
文学部	3-3	92
経済学部	3-3	89
文学部	3-3	83
経済学部	3-3	81
文学部	3-3	81

昭和高校の『進路の手引き』にある、主要大学センター入試ボーダー得点率のデータ。このほか、主要大学キャンパス所在地一覧、少ない教科数で受けられる国立大学、受験科目を減らすことでのデメリット、AO出題例、小論文出題例、さまざまな入試方法の比較、入学前課題例、先輩の合格の内容など、詳細なデータで作られている。全127ページ。

る考え方の基本を書くのは当然ですが、では書いてあることの詳細を生徒が資料を探してもなかなかたどり着きませぬ。受験に関するデータをコンパクトにまとめ持ち歩かせるのが得策です。その分

手間はかかるが、ページごとに担当者を振り分け毎年更新している。完成したら、各学年集会で内容を説明。担任にも面談のときに使ってもらおうようにしている。

次に、大学などから大量に届く資料の扱いたが、西村先生は余ってしまった前年度のパンフレット類も処分しない。1年生の終わりに「大学生交流会」という現役大学生と交流する進路行事があるが、その日の帰りにパンフレットを提供すると、生徒の手の中にもみるみる引き取られていくのだという。さらに募集要項もとっておき、新3年生の記入の練習と受験の動機づけに使っている。

デジタル情報についても進路指導部でチェック。例えば、『研究者リサーチマップ』というサイトは、大学院生が使っているということで西村先生がチェックしたところ、キーワードで研究者を検索できるので「大学で和歌について学びたい」などというニッチな生徒の要望に応えるにはぴったりだった。生徒の求める情報をよりピンポイントで入手できるのはデジタル情報のメリットだ。

これらの取り組みによって、昭和高校の先生方の間には「進路は情報戦」という考え方が浸透してきている。担任から進

路指導部への相談も増えた。また、具体的なデータの提示は生徒のやる気につながり、進路実績も上がっている。

他校へのアドバイス

西村先生「例えば、『大学は無理』『国立は無理』などとあきらめがちな生徒に、頑張れという精神論だけでなく、具体的なデータで『行けるところがある』と示すことは有効です。また、生徒の相談を受けて何とか道を拓いてあげたいと思っている担任にも具体的な資料を示したいもの。その際、できるだけ数字のデータを用いると説得力も増します。生徒はもちろん長年指導している先生方にも意外に先入観があり、それを払拭するものといえはやはり最新のデータです」

個別指導

黒子役やパイプ役で 連携の要に

個別指導は通常、担任の役割であることが多い。そこに進路指導部はどのように関わっていけばよいのだろうか。「進路指導部は黒子的な役割を担い、担任と生徒の信頼関係をじゃますることのないようにしたいものです」と西村先生。例えば、生徒に直接アドバイスするより、個人面談前に担任にアドバイスをするほうがより大切な仕事。担任と生徒の関係を揺るぎないものにしたほうが、生徒の学校生活が安定するからである。

また、「進路相談に入る前に、教員のネットワークを生かした準備がどこまでできているかで相談の質は変わります」と西村先生。進路指導部員は担任以外の大人と生徒をつなぐパイプとなり、奨学金や学費の話は経営企画室と、生徒の心身についての話は保健室と連携をとるとい

うように、生徒の個々の事情に応じてタイミングよくバックアップしていく。さらに、部活顧問の力を借りたほうがよい場合も多いし、学問分野についての相談などは各教科の教員につなぐことが有効だ。多くの教員との水の流れるようなネットワークを、いい進路結果に結びつく要であり、学校全体の一体感も生まれるそうだ。

他校へのアドバイス

西村先生「学年会に進路指導部が参加することがありますが、事務連絡だけですぐ去ってしまうのはおすすりませせん。『困っていることはないですか?』などと聞き、お互いに困っていることを話し合えるような雰囲気を作ることが理想的です。これまで進路部と学年団の連携がうまくとれていない学校の場合、まずは珍しくて役に立つ、即効性がある企画を提案するのもよいと思います。また、進路部は外部とのコネクションを多くもっている分掌です。学年団の先生と外部の人をつなぐ役目も積極的に果たしたいものです」

4 合格者指導

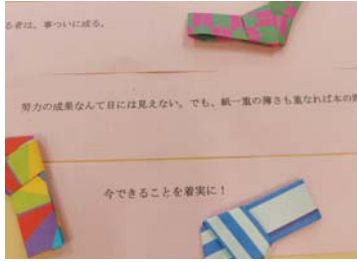
早期合格者の学力維持とモチベーション維持をフォロー

推薦やA.Oで合格した生徒たちは合格後、卒業までが長い。学力が下がったり、燃え尽きたり、また一般入試の生徒たちへの影響も考える必要がある。

西村先生は「進路指導部の役割には、早期合格者の卒業後の次のステージに向けてのフォローも含まれます」と言う。例えば、合格した生徒たちを集めて調査をする。どのような面接や試験を受けたかという調査は後輩の役に立つし、合格後に大学からどのような課題が出ているかの調査を通じて、入学後に必要な学力を補う学習を促すことにつながる。その後課題の進み具合をチェック、指導をす



進路が早く決まった生徒は校の花びらを作り、同級生が合格するたびに担任が掲示板に貼りだしていく作業を手伝った。



こちら、進路が早く決まった生徒たちによる手作りのおみくじ。有名な格言などを書き出して、センター前日の同級生をばげました。

る。また、生徒に出された課題は、今後の高大接続のための資料として進路指導部にストックしている。

昭和高校では、昨年度、推薦で早くに合格した生徒が集まってたくさんの桜の花びらを作り、一般入試で一人合格するたびに花びらに学校名を書いて掲示板に貼り出していくという作業を手伝った。生徒間での入学前課題についての情報交換の場ともなり、学習意欲が高まることも、最後の一人の進路が決まるまで学年の一体感が保たれたという。

他校へのアドバイス

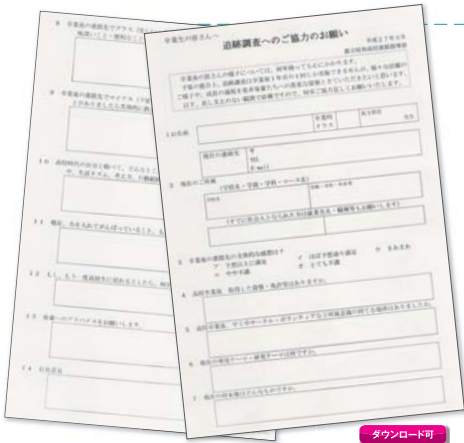
西村先生「進路が決まってしまうと、急に先生方が自分への関心をなくしてしまうと感じる生徒もいます。それはとても寂しいことなのではないでしょうか。『残りの日々も一緒に、そして進路先でも頑張っ』という励ましの言葉をかけつつけることで、まだ結果が出ていない生徒にもよい影響を与えたいと思います」

5 追跡調査

卒業後アンケートを今後の指導に生かす

卒業生の状況確認など追跡調査の必要性を感じていても、なかなかそこまで手がまわらないのが、多くの学校の実情ではないだろうか。また、せっかく実施しても回収率が低い学校もあるようだ。

昭和高校でも卒業1年後のアンケート



ダウンロード可

卒業1年後に送るアンケート。現在の将来像や、今頑張っていることや楽しんでいることをたずねる項目もある。

他校へのアドバイス

西村先生「卒業生のデータを集めるというより、現状の満足度・所属感や後輩へのメッセージなど、卒業生の成長を願う内容にするとよいと思います」

「結果」以外も「いいね」に大切に

私は進路指導の仕事は、行事や部活などと同じく人を育てる仕事だと思っています。子どもは多くの人に愛され、応援され、関わってもらったぶん成長します。そう考えると、受験期ほど、自分のために周りの人たちが一生懸命時間を割いて関わってくれていることなんて、人生でもそうありません。その経験や思い出しはその生徒にとって大切な宝物となるはず。結果、結果と言われてしまう進路指導の仕事。大変な部分もありますが、人生の第一歩を踏み出そうとしている子どもに寄り添える、素晴らしい仕事だと思います。これからも「結果」以外の部分も「いいね」に大切に仕事をしたいと考えています。

西村先生の考える進路指導部のスタンス